

他肺葉内転移 (pm2) を伴う肺癌手術症例の検討(6 転移の診断・治療, リンパ節郭清, 第46回 日本肺 癌学会総会)

著者	大谷 真一, 佐藤 幸夫, 長谷川 剛, 手塚 憲志, 遠藤 俊輔, 蘇原 泰則
雑誌名	肺癌
巻	45
号	5
ページ	542
発行年	2005-11-05
権利	日本肺癌学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134127

P-52 他肺葉内転移 (pm2) を伴う肺癌手術症例の検討

大谷 真一¹・佐藤 幸夫¹・長谷川 剛¹・手塚 憲志¹
遠藤 俊輔^{2*}・蘇原 泰則¹

¹自治医科大学 呼吸器外科；²自治医科大学附属大宮医療センター 呼吸器外科

【目的】他肺葉内転移 (pm2) を伴う肺癌手術症例の予後を病理所見因子別に検討した。

【対象】1984年～2003年に原発性肺癌に対して完全切除手術を施行された症例のうち、病理学的に他肺葉内転移 (pm2) が認められた14症例 (平均年齢63.4歳) を対象にした。

【方法】摘出標本の組織型、原発腫瘍径、リンパ節転移、胸膜浸潤、胸膜播種、他肺葉転移の個数について組織学的に検索し、各因子別に生存曲線を求めて予後を検討した。また、他肺葉転移巣の切除法 (肺葉切除あるいは肺部分切除) 別に予後を検討した。

【結果】各因子のうち、組織型が細気管支肺胞上皮癌 (BAC) である群、肺胸膜弾力膜浸潤のない (p0) 群、胸膜播種のない (d0) 群は有意に生存予後が良好だった。

【結論】他肺葉内転移 (pm2) を伴う肺癌はIV期であり、予後不良であるとされているが、BACやp0やd0で完全切除が見込める症例は、手術によって比較的良好な予後が得られる可能性がある。